

人権なら

2016年11月1日

第71号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

笑顔で歡樂の水平社敬老会

多彩な演し物に高齢者たちは満喫気分

第37回水平社敬老会が10月8日、川西町コスモスホールであった。各支局から高齢者274人が参加。多彩な演目の披露で、大いに賑わった＝写真。

植村照子・理事長は「毎年、この催しを楽しみにしていただいている。嬉しく思う。これからも大切に続けたい」とあいさつ。



奈良テレビ放送でお馴染みの“谷やん”こと、谷口吉一(たにぐち・よしかず)さんが司会を務め、開幕。落語家の桂文福さんがなぞかけを行い、弟子が皿まわしをお披露目。皿まわしの失敗に大きな笑い声が会場を包んだ。文福さんは相撲甚句や河内音頭を謡い、会場を盛り上げた＝写真。



朝起太郎(あさ・おきたろう)さんはサムライ姿で人参や胡瓜などの野菜を刀で切るなどして、漫談と寸劇を面白おかしく演じた。

歌謡浪曲師の真山一郎さんは忠臣蔵の一節を披露。大石内蔵助が関白名代・立花左近と偽って江戸に下る道行きの宿で本物と遭遇する緊迫した場面と、実は浅野内匠頭の家臣、内蔵助だと知った立花左近が、自らが偽りだとして謝罪。その場を取り繕う人情物語に参加者は聞き入った。また、歌謡曲も披露した。

経験者が葛藤を語り合う

「不登校・ひきこもり・ニート」問題でトークライブ

『不登校・ひきこもり・ニート』の今とこれからのを考える、をテーマに講演とトークライブが10月3日、橿原市・県社会福祉総合センターであった



＝写真。明見美代子・なら人権情報センター理事らが活動する奈良子若支援ネットワークが主催した。

講演は岡本圭太・就労相談施設相談員が「ひきこもり」からの生き直しをテーマに話をした＝写真。岡本さんは1974年、横浜市生まれ。大学での就職活動で挫折。その後、「ひきこもり」をめぐり、25歳の時、精神科に通院。20代後半は当事者グループや勉強会の運営に携わり、30歳で就職。こうした過程を笑いを交えて語った。岡本さんがひきこもりから抜けた「きっかけ」は、「自分一人で解決するのは無理だと諦め、誰かに相談しようと思った」ことだった。「文藝春秋の記事で、ひきこもりのことを知った」と語り、「自立とは多くの依存先を持っていること」だと述べた。



このあと、体験者によるトークライブ。大林裕典さん(幼稚園から高校まで不登校。精神科で臨床心理士)、良知克哉さん(高1夏から不登校。奈良教育大学入学。なら人材育成協会入社)、宇陀直紀さん(小学校から不登校。フリースクールを経て高卒認定資格を取得し大学進学。社会福祉士を志望)、岡本圭太さんの4人が「当時のしんどかったこと」「家族の関わりで嬉しかったこと、苦しかったこと」を語り合った。

神武天皇陵・今井町を歩く

第2回河合町人権講座でフィールドワーク

第2回河合町人権講座「神武天皇陵・大久保町(旧洞村)・今井町を歩く」が10月14日にあった。爽やかな秋を感じるフィールドワークだった。コースは神武天皇陵—おおくぼまちづくり館—綏靖(すいぜい)天皇陵—今井まちなみ交流センター・花薨(はないらか)—今井町。吉田栄治郎・天理大学講師が案内した。



うっそうと茂る木立を抜けると、神武天皇陵(写真)が目の前に現れた。途中、南側にこんもりとした木立の中に細い道が見える。旧洞村から畝傍山へ続く道だ。神武天皇陵が現在地に比定されたのは文久3(1863)年。幕府による修陵事業の際である。

その時、候補に挙がったのが、現綏靖天皇陵、丸山古墳、字ミサンザイの3箇所。だが、現綏靖天皇陵説は畝傍山との距離が離れていることから否定される。丸山古墳は被差別部落洞村の中にあることで否定される(公的理由は神武天皇の時代とは形態が合わない)。最終的に、現在地の字ミサンザイに落ち着く。

生活や歴史を伝えるおおくぼまちづくり館

しかし、字ミサンザイは古墳でさえない。国源寺という現在、大久保町南部に移された古代寺院の跡と考えられる。文久3(1863)年に土を盛って古墳の形を整え、周囲を樹林で囲った。数度の拡張工事と、橿原神宮外苑と一体化した「紀元2600年記念事業」による整備事業の結果で、現在の形になっている。

綏靖天皇は神武天皇の第三子とされ、神沼河耳命(かみぬなかわみのみこと)と呼ばれる。綏靖天皇も実在説は否定されている。歴史の多くが謎を秘めていて、興味深い。

おおくぼまちづくり館(写真)は、元は丸谷家の住宅だったものを大正9(1920)年にそのまま現在地に移転したものだ。

この建物を改造し、当時の生活、主要な仕事(製靴)の様子や歴史を伝えるために、2002年に開館された。



歴史資料室には、洞村から始まる歴史を伝える展示や、移転前の洞村の姿が模型で展示されている。人々の暮らしの様子や、主要な産業であった下駄表作りや靴づくりの製造工程なども紹介されている。

大久保町(旧洞村)の町並みは、碁盤の目状に街路が整備され、戦前の「部落改善事業」の成功例として、全国に宣伝された。

奈良町・郡山町と違い、村だった今井町

今井まちなみ交流センター「花薨(写真)」は県内初の教育施設、高市郡教育博物館として明治36(1903)年に建てられた。県指定文化財。今井町は県内の代表的な「寺内町(じないまち)」で、称念



寺は江戸時代に入ると大和五箇所御坊の一つとして、浄土真宗本願寺派の中心寺院となった。

今井町は東西600^{メートル}、南北310^{メートル}ほどの小さな町で、周囲に濠を巡らした環濠集落。戦国時代以降、周辺の村々から多くの商工業者が集まり、両替商、肥料商、酒造業、木綿業などが発達。江戸時代には、「大和の金は今井に七分」と唄われるほど賑わった。奈良町や郡山町と同じように「自治の町」だが、今井町と自称しているだけで、奈良町、郡山町とは違い、身分としては村であり、年貢納入の義務を負っていたという。

箸尾地域の歴史と生活文化

同和問題関係史料センターがフィールドワーク

県同和問題関係史料センターの第3回「県民歴史講座」が9月27日にあった。「箸尾地域の歴史と生活文化」をテーマに広陵町箸尾周辺を歩いた。コースは近鉄箸尾駅－葛城川



－東大福寺跡－櫛玉比女命神社(写真)－事代主神社－箸尾城跡碑－大福寺－教行寺－箸尾の町並み。奥本武裕・同所長が案内した。

平安時代から室町・戦国時代にかけて、長川庄と呼ばれる荘園が現在の広陵町から田原本町にかけて広がり、有力な武将として成長したのが箸尾氏である。江戸時代の初めには、箸尾村(村高1800石)が存在し、中期までに、箸尾萱野村・大場村・的場村・弁財天村・南村の5村に分かれた。

この地域は下街道と三輪街道が交わる交通の要地である。教行寺の門前に町場も生まれ、繁華の場所だった。明治時代には、河合村(現河合町)の沢・大野・寺戸の3つの大字を加え、萱野・的場・弁財天・南村・大場村・中村の9つの大字で構成された。大正7(1918)年には大和鉄道(現近鉄田原本線)が開通し、箸尾駅が設置された。

い草栽培が盛んで戦後は蚊帳・綿布業が発達

その後、昭和2(1927)年に町制を施行。1956年には広陵町の一部となった。高田川・葛城川・曾我川の合流地に近く、水害の多い地域で、湿田が多く、藺草(いぐさ)栽培が盛んだった。戦後は蚊帳製造業・織布業が発達した。

箸尾駅前から東へ少し歩きだすと、葛城川の堤に突き当たる。奈良盆地中部の主要な河川は南北に並行して流れ、多くが天井川だ。葛城山・金剛山の東斜面

から流れ出す水が、御所市－大和高田市－広陵町から河合町に至り、曾我川に合流する。この流域一帯では、大きな水害が元文5(1740)年に発生し、下流域35か村が共同で幕府へ「訴願」を行った史料が残る。

東大福寺跡(的場)には現在、墓所にあった観音堂だけが残る。高野山真言宗の寺で、明治時代に廃寺となり、西大福寺のみが残った。江戸時代には、6坊の塔頭があり、30石(箸尾村)の寺領を持ち、独自の村役人も置かれていたという。

教行寺は真宗大谷派「五箇寺」の1つ

櫛玉比女命神社(弁財天)は、大福寺の鎮守神で、全長30mの前方後円墳(櫛玉比女命神社古墳)の後円部上にある。江戸時代には弁財天社と呼ばれ、4か村で宮郷が形成されていた。現在も弁財天・的場・萱野・南の4つの大字で、戸閉(とだて)祭りと呼ばれる祭礼が行われている。

事代主神社(南)の祭神は蛭子命(えびすみこ)。史料には、「恵比須社」「蛭子社」「西宮社」とも表記されている。本来、漁業の神で、中世以降、市場の守護神として信仰された。

箸尾城は現在、ほとんど痕跡をとどめていない。箸尾城趾碑が的場の地に建っている。箸尾氏は摂関家領長川庄の荘官(しようかん＝荘園



の管理を任された武将)だった。

教行寺(写真)は真宗大谷派の「五箇寺」(東本願寺の院家の格式を持った寺院)と呼ばれる中心寺院のひとつ。「箸尾御坊」とも呼ばれる。

戦国時代の百済庄(現広陵町)の地に「百済衆」と呼ばれる一向宗門徒の集団がいた。その活動が後に、教行寺(東本願寺)・名称寺(大和高田市曾根・西本願寺)へとつながり、大和国で最大の下寺を持つ有力中本山としての勢力を持ったという。

学童クラブがお月見ライブ

趙博さんが「ヨイトマケのうた」などを熱唱

三宅町学童保育クラブ(ひまわりの家)が10月7日、

三宅小学校で「わくわくお月見ライブ」。趙博さんのライブを楽しんだ。趙さんは韓国童謡をはじめ、「リムジン河」「アリラン峠」など、次々と歌を披露。ブク(農楽太鼓)の低く太い音色と、趙さんの野太い歌声の「ヨイトマケのうた」に聞き入った。「グチョキパーのうた」



では子どもたちが大合唱し、大いに盛り上がった。



この催しに「みやけまちづくりの会」の皆さんが協力。フランクフルトやポテト、ジュースを用意してくれた。

胸に迫る映画「ルンタ」の映像

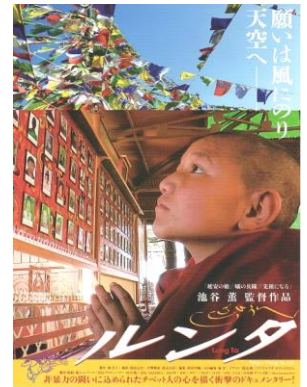
「奈良県大芸術祭」イベントの1つ、映画「ルンタ」上

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

社会が分断されている。いろんな場面で対立構造がみられる。双方の利害がぶつかっているのだ。経済状況の悪化が政治的対立に及んでいる。この動きはますます拡大強化されそう。強い方に寛容さが求められるのだが、それらの人たちには、まったくその気がないようだ。弱い方が泣き寝入りし、我慢し続けるしかないのか。でないと、対立は、いずれ、どこかで、衝突するかしかない。その手段は選挙や裁判が考えられるが、いずれも根本的な解決には至らない感じがする。まっとうな議論がなされない中で、社会に絶望する人たちを生み出すことだけは何としても避けたいものだ。

映と講演会が9月24日、ならまちセンターであった。

映画は「中国政府の圧政に対して非暴力の闘いを不屈の精神で続けるチベットの人々」と、「焼身抗議」という衝撃的な生き様に向き合うことをテーマに描かれたドキュメントだ。



中原一博さんは建築家。チベット亡命政府の人々と運命的な出会いの後の1985年、ダラムサラに移住。政府庁舎・僧院・学校など、数多くの建築物の設計に携わる。1997年にNGO「ルンタプロジェクト」を立ち上げ、故郷を失った多くのチベット人を支援する。2008年、全土に抗議活動が広がると、非暴力の闘いを発信。2009年に焼身抗議が始まって以降、詳細なレポートをインターネットで発信し続けている。映画はその活動を描く。

前半はダラムサラを舞台に、そこで暮らす亡命チベット人が焼身をどのように受け止めているのかを追う。19歳で焼身した女子中学生ツェリン・キに心を揺すぶられ、17歳で焼身した尼僧サンダ・ドルマが遺した詩を紹介する。後半は焼身者の足跡を辿っていく。

監督の池谷薫さんは、「延安の娘」「蟻の兵隊」「祖先になる」で数多くの国際映画祭で賞を取っている。「ルンタ」は、チベット語で“風の馬”を意味する。天を翔け、人々の願いを仏や神々のもとに届けると信じられている。映画はルンタに導かれ、中原さんを水先案内人として「慈悲」や「利他」といったチベット人の心を探る旅を描く。「人間の尊厳」と、その生き様をテーマにした映像は胸に重たく迫ってくる。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/